

神功皇后のつわり薬

張仲景が亡くなったのは一般的には紀元219年と言われている。後漢が終わって、魏呉蜀・三国時代到来の節目の年に当たる。英雄たちが群雄割拠していた。来年は張仲景没後1800年になる。

当時の日本は神功皇后の治世であった。『日本書紀』によれば、神功皇后39年（紀元239年）の項に「魏志云、明帝景初

三年六月、倭女王遣大夫難斗米等」とある。『魏志倭人伝』でいう倭女王とは、卑弥呼を指している。つまり『日本書紀』は、魏志では神功皇后のことを卑弥呼と呼んでいるとさりげなく記述しているのである。南北朝に北畠親房が著した『神皇正統記』の神功皇后の項でも、同様の見解を示している。ところが現代日本史で最初に登場する日本人名は卑弥呼であり、神功皇后ではない。ましてや神武天皇でも天照大神でもない。戦後間もなく、GHQの神道指令によって『古事記』『日本書紀』まで遠ざけられた影響が、今でも影を落としているのである。

『記紀』は支那の史書に比肩するような国書を作りたいと願った天武天皇の発案によって成立した。『日本書紀』の元の書名は、『漢書』『後漢書』『晋書』『隋書』に倣った『日本書』であろうと類推する研究者もいる。『倭書』ではないのである。『古事記』（712年）では「やまと」のことを「倭」と当て字していたが、8年後に成った『日本書紀』（720年）では「日本」と改めている（改め損なった地名や人名もあるが）。例えば神武天皇の諱「神倭伊波禮昆古」は「神日本磐余彦」に、「倭建命」は「日本武尊」に改定されている。8年間で国語と漢語の比較研究と訓読の開発が一気呵成に進歩した。訓読の発明は日本人の発明の中で最たるものであろう。「倭」字には「みにくい」という意味があることに気

づいたのである。同様に「邪馬台国」の「邪」は「よこしま」、「卑弥呼」の「卑」は「いやしい」である。これらは中華思想の現れである。

伝聞に基づく玉石混交の「魏志倭人伝」は、漢字数にしてわずか2,000文字足らずに過ぎない。「卑弥呼」を知りたければ『日本書紀』の神功皇后の項を読めばいいのである。この項だけで漢字で6,000文字余りあり、年月日も詳述されている。

神功皇后の古代名は息長足^{おきながたしひめのみこ}姫尊である。恐らく使者が「姫」と呼称していたので卑弥呼になったのであろう(同様に「我が国」が「倭国」に翻訳されたのであろうと、『神皇正統記』では述べている。同書はまた、邪馬台はヤマトであると特定している)。大和朝廷の仲哀天皇の後であつた神功皇后は、天皇とともに筑紫に行幸する。先ず伊^い観^{くわん}県^{けん}(^{なのおかた}魏志倭人伝)では伊都国とある)、次いで^{なのおかた}儼^{えん}県(志賀島出土の金印には漢委奴国とある)に至る。そこで天皇が熊襲征討を検討していたとき、ある神が皇后に乗り移って神託を下した。熊襲よりも新羅に行けという。しかも、たつた今皇后が懐妊したが、その子が新羅を得るだろうというのである。それを信じなかつた天皇は熊襲征討を試みて失敗し、間もなく突如崩御された。そこで皇后は神の導きに従って、仲哀天皇九年(紀元200年)十月三日に新羅に向けて出発するのであ

る。この時皇后は臨月に当たっていたので、石を腰に挟んで出向いていく。その後の経緯を知りたければ『日本書紀』をお読み戴きたい。

ところで『大同類聚方』(808年)のツハリヤミ(妊娠悪阻)の項に、「管水根薬…氣長足媛命、御つはりを成し給ふの御時、武内宿禰の上供せる所の良方也。元は少彦名命の薬方也。つはり女、三、四月の間、胸痛み、食の臭ひを悪み、醋味を好む。或は塩梅又は杏、桃、瓜等の生物を好みて食ひ、飲食進まず、胸痞り、惣身熱く寒を悪み、日夜不快に臥す者に与ふべき神方也。オオハコ(車前子)、エヒヤス(芍薬?)、タマカハ(桂皮)、カリヤス(刈安)、ハジカミ(生姜)、マツホト(茯苓)、ミクリスガネ(香附子?)。七味を水にて煎ず。」とある。武内宿禰は、景行、成務、仲哀、応神、仁徳の五代の天皇に仕えた重臣である。途方もない長寿にあやかつてその名が語られた可能性はあるが、医薬にも造詣が深かつたのであろう。『大同類聚方』でも武内宿禰の薬方がときどき登場する。明治22年から昭和20年までに、彼の肖像を取り入れた紙幣が五回も発行されている。今の聖徳太子並の取り扱いである。

小半夏加茯苓湯でも効かない妊娠悪阻に出会つたら、日本のこんな薬方を使ってみるのもよいだろう。張仲景と同時代人であつた神功皇后や武内宿禰に思いを馳せながら。